エヴァと太陽の塔

Abe Whey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エヴァと太陽の塔

【Ｎコード】
Ｎ６０４１Ｔ

【作者名】
Ａｂｅ　Ｗｈｅｙ

【あらすじ】
太陽の塔には三つの顔があります。正面中央の「現在の顔」上の「未来の顔」背後の「過去の顔」
その三つのテーマにインスパイアされて、実験的にゆるーく書いてみました。性描写はありますが、大したことはありません。
芸大生の栞（しおり）と託馬（たくま）は創世記のアダムとエヴァそのままのカップル。羞恥心というものをほとんど感じることがない。
デートで万博記念公園に来て、そのまま茂みの中でセックスをする

が、そんな二人を太陽の塔が見ていた……

現在の顔（前書き）

創世記二章

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。

人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。

そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

創世記三章

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。

「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして生命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」

主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。

こうしてアダムを追放し、生命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

現在の顔

「何読んでんの」
と託馬(たくま)に尋ねられたので、
「旧約聖書」
とだけ答えた。途端、左隣の人が固まったのが伝わる。託馬はもう動じないだろうが、左隣への言い訳の為、栞(しおり)は言葉を継いだ。
「次の二科展の題材、『楽園追放』にするねん。だから資料の為に借りてきた」
「へえ、栞、二科展出すんだ」
「うん。追放されたアダムには労働の苦、エヴァには陣痛の苦っていうテーマで、、現代的に描くねん」
御堂筋線終点からモノレールに乗り換えて数分、千里ニュータウン過ぎると、急に車窓が青くなり日光が差す。大阪のドーナツ住宅地の奥の奥、広大な森の広がる地域に入ったのだ。
日本万国博覧会は何十年も昔に終わり、全ては一度、土へと帰した。現在、かの地は樹木が茂り、万博記念公園、自然文化園として葬られている。しかしその中心には、当時の記念碑が今なお、土に帰ることなく白々と息づいている。
「マジで何なんだろうな、これ」
託馬の呼吸の乱れが伝わる。そう、太陽の塔。岡本太郎作。今だ生き長らえ、頂上に黄金をいただいている。
客が無目的に万博記念公園に入ると、足と眼がどうしてもこの太陽の塔に引き寄せられていく。栞はその現象に身体を任せた。それは、栞にとって旧約聖書と同じぐらい不可解で魅せ惹かれる存在だった。
託馬が溜息をつく。
「なんかエヴァの使徒に似てるかもね」
「あー、確かに庵野監督と岡本太郎、同じ属性の芸術家グループか

も」栞は持てる雑学を披露した。「石原慎太郎もそう。『太陽の季節』」
「何で東京の都知事が関係あるのさ」
「この小説の中に、障子を突き破る超有名な場面があるけど。昔、万博の頃は太陽の塔の周りに屋根があって、塔と屋根の構図がそのままやったって」
すると、託馬もようやく察したらしく、
「あ、知ってる。そのシーンだけ。でも結局、みんな過去の話じゃない」塔の影に託馬が踏み込む。「こないだ大学に来てた、代官山のデザイン会社の人が言ってた。『過去に頼らず、無からヒットをバッと出せる職人しか、今の画壇にはいらない』って。俺、ムカついたけどちょっと感動した」
栞は高い天を仰ぎ息をついた。
「神様やん、それ。東京の人は傲慢やね」
「あの先生、『おまえら世代の芸大生なら、神レベルを越えられる』って堂々と言ってくれる。俺、あの授業結構好きかも。評価は厳しいけど」
太陽の塔が後ろに下がってゆく。代わりに見えてくるのは、過去、現在、未来を象徴する三つの太陽のうちのひとつ、『黒い太陽の顔』
栞はふとよみがえる思い出があり、話を続けた。
「これバックにして、死んだおじいさんとおばあはんが写ってる写真、実家で見たことあるわ。万博当時のやつ」
万博記念公園を縦断し、民族学博物館の企画展、「朝鮮半島のシャーマニズム」に入る。今、最も関心の強い、朝鮮半島の演劇のコーナーまで託馬と手を繋ぎながら、栞は話をも引っ張る。
「朝鮮文化とか、悪趣味って固定観念ある人多いけど、私は惹かれるけどなあ。鶴橋とか」
「鶴橋って、あのガード下の市場、魚とか肉をそのまま売ってる場所」
「うん、朝鮮文化について、託馬はどう思う」

「うーん」
農楽劇の展示を見やりながら、託馬が返答に困った様子なので、彼の内心を察した。恐らく、日本人の目から見たらジェイソンのような、穴をえぐり開けた仮面の個性や、演技前の儀式で使う牛頭に食指が動かないか、ひょっとしたら、どちらかといえば嫌いなのかもしれない。
「そんな風に思ってたらあかんで」
「あ、うん、うん」
「これから団塊世代が退職したら人材足りんようになって、外国人労働者、いっぱい来るようになるかもしれんし」
「マジ、そうなったら俺生きていけないかも」陰陽五行を象徴する、原色の韓服を眺めて託馬がぼやく。「それってかなり、辛くない。あっちの人、はっきりもの言うし」

博物館を出て再び万博記念公園に入り、現代美術の森に入った時、託馬がニヤニヤと囁いてきた。
「あのさ、今日はホテル行かないで外にしない」
オブジェを鑑賞していた栞は、頭を上げた。
「ちょ、なんで」
「だって、栞、アダムとエヴァの話読んでただろう」
こんもりとした現代美術の森は人気がなく、ただ湿気と生の土だけがべったりと広がっている。街では聴けないような鋭い鳥の声が、栞の耳をつんざいていった。
「わかった」
銅や石やガラスの現代美術、原始の地球から存在する物質に囲まれて、お互い裸になり抱き合う。コンドームは持ってきていないが、結果などどうでもよかった。これは、自分たちが愛し合っていると納得するための大切な儀式なのだから。今のつながりだけが欲しい。
ふと、天の梢の隙間から太陽の塔の裏側、黒い太陽の顔がちらついた。ちょっとだけだが、栞はその視線に恥ずかしくなった。

外ということでいつも以上に興奮してしまったらしく、託馬は簡単に尽きてしまった。背中に枯葉や土が付くのも構わずお互い抱き締め合い、そのまま腐葉土の中に転がる。
「託馬」
「何」
「なあ、人は元々森の生き物で、ごく普通のことやのに、なんで早くイッちゃうの」
猥談めかして囁くと、
「そりゃあ人はいつも、服着てるせいだ」託馬らしくない、断定したような答えが返ってきた。「こんな風に森の中でヤッてると、何で人間って服着てるんだろう。って、俺、馬鹿馬鹿しくなってきた」
「うん、うん」
「服だけじゃなくて、恥ずかしさとか罪悪感とかを隠す心の蓋。そう、心のＡＴフィールドかな。さっきの仮面みたいな」
託馬の口から先の企画展の感想が洩れだしたので、栞はああ、やっぱりこの人と自分はベストカップルなんだ。と水を含むように喜びを味わった。
託馬の心音に合わせて、栞も想いを紡ぐ。
「仮面、人間のタテマエ、の象徴かも。ＤＮＡ、親から代々染みわたってゆく、業、。原罪」
「考えすぎるなよ」
託馬が髪を撫でてくれる。足の赤い、鷺のような鳥が一羽、ゆっくりと狭い上空を羽ばたいてゆく。その先には塔がある。
「栞は自己中だから、すぐ内面に落ちたがる」
「それ、褒め言葉ととっとくで」そこで栞は起き上がった。「芸大生が、自分の内面と向き合わなくてどうすんのさ」
ジーンズを穿く。今日はもうゴールデンウィークの最終日で蒸し暑さがあり、上半身だけでも裸のままでいたかった。だが、しぶしぶとブラウスのボタンを留める。
「世の中って不条理に出来てんなあ」

一番上のボタンだけ外して、栞は呟いた。

ぶらぶらしているうちに、万博記念公園内の花の丘に辿り着いた。連休はポピーの季節で、薄い絹に似たオレンジや白や黄色の花びらが、丘の風に不規則になびいていた。

ずっと歩きっぱなしで、足ががくがくになっていたのでとりあえずベンチに座る。そして無意識のうちに、身体に付着している枯葉の欠片や泥を、叩き合い払い合い始める。ふと視界に入った太陽の塔を伺うと、向こうからわざと目を伏せて、ぷいと横向きの姿勢になっていた。栞も身体を横に向けて、背中に付いた泥を託馬に払ってもらう。

「タオルかなんか、買ってこようか」

と、その時、

「お兄ちゃん、タオル貸したげよか」

託馬に掛けられた声に、栞は頭を上げた。

「あ」

お互い呟き合う。そこにいたのは母と、その隣には父の左手が、しっかりと握られていたのだ。

過去の顔

始めて栞が万博記念公園に来たのは、六歳の誕生日を迎えた歳の盆だった。父と母と祖父、栞。家族そろってドライブに来たのだ。自分はお気に入りのブルーの半袖Tシャツを着て、父はパンチパーマにサングラス姿。まるで犯罪者のようだったと記憶している。

太陽の塔は修復前で、黄金の太陽の顔には錆のような汚れが付き、真中の顔は涙を流し、裏の黒い太陽の顔は、黒いタイルが剥がれ落ちていた。鮮明に覚えているのは、とにかく怖かったからだ。

油蝉の声の響く公園を散策中、ふと、父が俯き加減にぼやいた。

「信じられへん。あの科学都市も社会主義の夢も、完全に森に戻ったんや。日本の未来はテクノポリスになるって信じてたのに」

「栞、ここにな、昔ビルマ館があったんやで」祖父が教えてくれる。

「ビルマ人な、パンツ穿かへんねんぞ。ロンジーいう布だけ穿きよる」

祖父が戦争当時のビルマを語り始める。栞の頭に浮かんだ、行ったことのないビルマのイメージは、ジャングルに蔓がぶら下がり、ひどく暑くて水の多い所だった。

「ビルマには、お寺がいっぱいあんの」

「おう、ごついお釈迦さんが寝てはる。村人が仏塔で勤行しとる。今も多分、変わってへん」

「勤行って、何」

「栞と一緒に毎朝やっとる、死んだおばあちゃんなんまんだぶつや」

その時、父が嘲笑めいた鼻息を吐いた。

「なんまんだぶつ、だから親父は立ちおくれてんのや。栞、神さん仏さんは怖いんやで」

「なんで」

父は少し悩んだ後、まるで教え諭すように、こう答えてきた。

「なあ栞。おまえは大きなっても、阿片人間になったらあかんで。

神さんにすがったらあかんで。もし　お父さんが死んだり、突然、栞の前からいなくなってても」
　阿片の意味を考えながら空を見上げた時、太陽の塔の黄金の顔と視線が合ってしまい、栞はなんだか居心地が悪くなった。塔は遠目にも、質感がさわっと肌のような感じがして、父の言う神さんみたいなのだ。でも、神さんが動き出しても逃げてはいけない。ここからひとりでなんて帰れない。
「何や、栞。あれが怖いんか」
　父が構ってくる。五歳といえども自尊心はある。
「怖いことあらへん」
　すると、母が父に向かって、棘を含んだ言葉を吐いた。
「今日のお父さんの方が怖いんとちゃうん。この格好」
　父が背を向けてカメラを取り出すと、測道沿いのハイビスカスにピントを合わせ始める。その時、栞の頭上で祖父の雷が落ちた。
「馬鹿もん。まず栞の写真撮ったれや」
「チッ」
　父が舌を打つ。
　一時間ほど後、ようやく塔の御前から解放され、隣の遊園地、エキスポランドに入る。
　しかし、特にめぼしいものもなく退屈していると、また父がちょっかいを出してきた。
「栞」
　父が身をかがめ、額にサングラスの蝉のような眼を近寄らせた。
「ジェットコースター独りで乗って来いや」
「なんで」ぎくりとした。「あんなん、大人しか乗せてくれへんで」
「大丈夫や。こっち来てみ」
　父が、野球帽の男の子の絵に栞を並べる。
「大丈夫。もう、ぎりぎり身長足りてる」
　事態を察したのか、母が父を諌めてくれた。
「やめときいな、栞こわがってる」

祖父も味方に入り、再び父を怒鳴る。
「阿呆馬鹿もん。もしなんかあったらどうすんねん」
しかし、栞は高い軌道を見上げ、はるか大人のお姉さんの絶叫を聞きながら、反面、母と祖父に甘えたくない葛藤に捕らわれていた。自分は来年小学生になるのだ。就学前の時期、子どもの自我は完全になると言われているが、確かにこの時の栞はすでに、百二十センチの身長と、隣のエキスポタワーほどの高い鼻を持ち合わせていた。
栞は持てるだけの知識を振りしぼって、母と祖父に言い聞かせた。
「大丈夫、私、落ちて死んだら、裁判でイシャー料とって、お医者さんに払ろて」
父のぎゅっと汗ばんだ手をほどくと、ダイダラザウルスコースターの、乗り場入り口の階段と向き合う。
「待ち」
母が呼び止めた。そして、父と祖父に対してまなざしで訴えるような一瞥をくれると、
「イシャー料、お母さんと栞、女二人でもらお」
始めて乗ったジェットコースターの座席には、平べったい、身体にまわす座席ベルトがくたびれていた。母がそれを手に取り、カチリと留めてくれる。しかし、栞のちいさな胸の前で、ベルトはたるんだままだった。
「遠心力つくし、大丈夫」
母も自らのベルトを締め、正面の高い軌道と向き合う。横顔が、乗り場の屋根の影の中で白く光っていた。
コースターが乗り場を離れ、軌道の坂道を登ってゆく。首を伸ばして下界を見た。真下の植え込み、ソフトクリームの店の緑色の屋根の近くに、見守る父や祖父が見えたかもしれないが、そこまでは憶えていない。
コースターが滑り落ちる瞬間、最後に視界に入ったのが、太陽の塔の巨大な避雷針と汚れた金色のマスク、尖った両手だった。生まれて初めての死の通過儀礼中、風を受けながら栞は太陽の塔だけを

見つめ続けた。
（もし死んだら、あれに迎えられるんやろか）
完全に理性が戻るのは、三分ほどの儀式が終わった後、父が食堂のケースの中の、作り物のカレーライスを自分に勧めてくれたところからだ。
「栞、カレーいらんのか。かき氷は」
香辛料の匂いを嗅いでも、食欲はまったく湧かなかった。とにかく身体中が震え、つま先や指が冷たかった。
「いらへん。酔った」
恐怖を隠すため、嘘をついた。
「ほな、せめてお母さんと半分こしやい」父が頭を掻く。「栞はまだ子どもなんや。ちゃんと食べなあかん」
母と交代で、ウスターソースを掛けたカレーを口に持っていく。確かインドカレーだった。しかし今のインド料理店のものとは違う、普通の、ほとんど辛さのないチキンカレーだったと思う。万博当時から残っているような食堂で、食券を自販機で買って支払った。
母も恐らく食欲がないのか、まずそうにスプーンを口に運んでいる。やがて、薔薇柄のスプーンを紙ナプキンに置いた。
「栞が落ちそうになって、私、ずっと、ずっと栞の身体押さえてたわ」
その後、父と母と祖父は、近所の家がどうかしたとか、田んぼの土地が何とか、普通の家族の昼食に　ありがちな話をしていたと思う。ただ、母の放った会話はボールのように跳ね返らず、転がったとしてもすぐに止まってしまった。自分と同じように、母も祖父も気遣い合っているんだな。と栞は六歳のカンで感じ取った。
（なんで大人は気、遣い合うんやろ）
母の指輪をはめた指もパーマを掛けた髪の毛も、汗で崩れた白い化粧も、太陽の塔とちょっと似ている。と思った。メッキの剥げた顔は強ばり、ただ眼力だけを無言で、栞以外の向かい合う家族にぎらつかせていたのだ。

その夜の夢も憶えている。夢の中で、栞は旅館の部屋にいた。竹籤の照明の下に、両親が向かい合っている。二人は栞をあえて無視して大人の話を続けていた。

突然、父が猫の子のように栞の背中をひっつかみ、窓から外に放り出した。栞は闇に落ちながら父を見上げる。窓の四角い光が小さくなっていく。

捨てられたショックで、泣くことも忘れて落ち続けた。そこで場面が変わり、栞は地面のない宙ぶらりんな場所に出た。頭上に石ころだらけの黄色い星と、足元の下には、よく『こどものかがく』に写真が出てくる青い惑星が浮かんでいる。その頃、地球が大地とよく解っていなかったので、栞はとにかく、土っぽい星に行けば、死んだ祖母が助けてくれると思い、そちらの方を向いた。

しかし、月の表面には祖母ではなく、あの太陽の塔が両手を広げ、パラボラのような黄金のマスクを向け、空洞の目の虚空を向けていた。騙された。今度こそ死んでしまうと思い、栞は叫びを上げた。

そこで目が覚めたが、その後、どうしても寝入ることが出来なかった。朝五時のＮＨＫラジオの浪花節を聞きながら、隣で眠っている祖父が夜明けと共に死んでしまい、両親も今日の仕事から永遠に帰ってこず、この広い家に、たった独り残される悪い予感に捕らわれた。

自我が完全になった栞が初めて感じ取ったのは、両親の仲の悪さと、家長たる祖父の死、家族を含む人間関係の乾土の脆さと、そして、結局最後に信じられるのは自分だけ、自分最高という、ひとすじの希望だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6041t/

エヴァと太陽の塔

2011年5月28日14時10分発行